

平成27年度

高齢社会 フォーラム

in 東京

挑戦するシニアが時代を開く
— 多世代が支えあう地域社会に向けて —

日時

平成27年7月31日(金)

10:00～15:30(9:30開場)

会場

イイノカンファレンスセンター

(定員:200名)

in TOKYO

主催:内閣府 後援:文部科学省、厚生労働省
協力:高齢社会NGO連携協議会(高連協)

注:日時・会場に比して 主催:内閣府 の記載文字があまりにも小さい。

開催挨拶

ROOM : A1・A2・A3

主催挨拶

内閣府大臣官房審議官

小野田 壮

基調講演

「シニアが主役 地域創生 — 出かける、出会う、何かできる —」

樋口 恵子

高齢社会をよくする女性の会 理事長



プロフィール

評論家。高齢社会NGO連携協議会共同代表。高齢社会をよくする女性の会理事長。東京家政大学名誉教授・同大学女性未来研究所長。社会保障審議会、男女共同参画会議民間議員等を歴任。著書は、「祖母力」、「女、一生の働き方」、「私の老い構え」、「人生100年女と男の花ごよみ」、「人生100年時代への船出」、「おひとりシニアのよろず人生相談」等。

高齢化社会対策説明

内閣府高齢社会対策担当参事官

藤澤 美穂

- 高齢化の状況
- 高齢者の姿と取り巻く環境の現状と動向
- 高齢者の地域社会への参加に関する意識
- 高齢社会対策の実施の状況

平成27年度高齢社会フォーラム in 東京

平成27年7月31日（金）

基調講演

「シニアが主役 地域創生 一出かける、出会う、何かできる」

樋口恵子 高齢社会をよくする女性の会 理事長



みなさまお早うございます。

昨年もここで話をさせていただきましたけれど、毎年この内閣府によるフォーラムが、日本中の高齢者のこの1年の活動の集積というようなようすを呈して参りまして、ことしもまた全国津々浦々からお出でくださいました皆さま方と経験を交流しあえるひとつの出会いでございます。このわたしのサブタイトル「出かける、出会う、何かできる」、これを高齢者の3DDと呼びます。だれが呼んでいるかということ、わたしが呼んでいるだけなのですけれど。

人間は社会的動物でありまして、どこかに出かけられかと出会う。そこで社会的人間関係が結ばれることを通して、何かができるのでありまして、「出かける、出会う、何かできる」という3D主義をますます広げていきたいと思っております。

平均寿命が女性86.83、男性80.50に

さて、朝からお熱うございます。年々熱くなっているのじゃないですか日本は。これと同じように年々高齢化はすすみ、日本全体をじりじりと焼きつくすかのように高齢化の度合いを深めております。わたくしたちはその危機を認識しつつ、それに対応をして

いくこととなります。

きのうちちょっとうれしいニュースがございましたね。**平均寿命**がまた伸びておりました。昨年ようやく80歳の大台を越えてくれた男性諸兄が、ことしは80・50と、四捨五入すれば81に届くところまでまいりました。こども男性が多いようですが、みなさんおめでとう。と同時に皆さまのご節制のご活動に心から敬意を表します。

また女性のほうは86・83に。東日本大震災の年に世界一の座を譲ったこともございましたけれど、また世界一に復活しております。世界3位の男性と両方合わせてすれすれで世界一ではあるまいか。オリンピックにもし「高齢化」という種目があれば、日本は労せずして金メダル3つ4つくらいころがりこんでくる。

そこを生きるわたくしたちは、「人生90年」「100歳社会」といわれるこの長寿社会を生きる初代として、金メダルにふさわしい生き方古い方をしなければ。もちろんすでに105、106歳の方もいらっしゃいますけれど、この方々は同世代のほんの少数であり、60、70のころに「人生90年社会を生きるんだ」という自覚はしていなかったと思います。

いまきょうここにお集まりの方は60歳以上が多いようでございますけれど、実はこのことは若い人たちにも全部に共通するのです。40代にはご自身の「人生100年」がございました。10代の少年少女にはこれから90年生きるかもしれない「人生100年」がございました。そして虹色のもやの彼方にまだ形をなしていないこれから生まれてくる人びとの「人生100年」があるのでございます。

平和の証として戦後70年を迎える

わたくしたちは「人生100年」のモデルをつくっていく幸か不幸か初代という光栄を担ってしまいました。人間さまざまな選択ができますが、生まれる時と場所は選ぶことができません。幸いにも幸いにも戦争が終わって平和が訪れた中で物ごころつき、あるいは生まれました。そして戦後70年、ここにいらっしゃるほとんどすべての方々は、「戦争を知らない大人たち」として70年を生きてきたわけでございます。

わたくしは当年83歳になりますが、13歳までは「平和を知らない子どもたち」世代であります。平和の中に育つということ、自分の未来を画くということ、わたくしなど女でしたからそれほど深刻ではありませんでしたけれど、わたくしと同級生の中学1年生であった少年たちで自覚ある者は、「おれの人生は二十歳で終わりかなあ」といっていたことが思い出されます。

皆さんご存じの山形が生んだ作家、藤澤周平氏は昭和2年生まれ。ですから敗戦を迎えたとき18歳。次の徴兵検査で戦場に引き出されるという年齢でありました。彼の随筆のなかに、終戦になったとき、ひとり、もう他人に預けてしまって自分のものでなかった命が急にもどってきて、これからの命はおまえの自由に使ってよろしいといわれた感じで、さてどうしていいかしばらくとまどった、というエピソードが、たいへん強烈

に身にしみる終戦記念日に近いこの頃でございます。

わたくしたち平和の証として、この人生90年、100年をしっかりと守りつづけ、いま戦後70年を迎えております。自由裁量、自分で選びとった人生が画ける、「命が主人公である」ということが、平和の代名詞なのだとつくづく思っております。

しかし、人間それぞれに、生まれてきた時代に課せられた歴史からの宿題がございます。われわれの世代は、この平和の証である長寿と長寿をつくり出す基盤である一定の豊かさ、社会保障の発達、これは日本政府にも国民にもたいへんな貢献で、世界一の長寿に結びつく医療保険をつくり年金制度をつくり不況のど真ん中で介護保険までつくった。その土台がいま揺らいでいますけれど、日本人の健康を支え、長寿を支えたものは、なんといっても平和と一定の豊かさであり、それを築いたのもわたしたちの世代でございます。

「人生65年型」から「人生90年型」社会へ

その結果である長寿、世界一の長寿がもたらすさまざまな問題があり、社会全体を「人生65年型」から「人生90年型」へ変えようということが政府の閣議決定で定められたのが、2012年版の「高齢社会対策大綱」でございます。

本日の開催の協力者である高連協、わたくしが堀田力先生とともに代表をつとめる高齢社会NGO連携協議会は、そのような高齢者が90歳から100まで役立てるような社会システムをつくり直すよう提言を申し上げまして、この「高齢社会対策大綱」の中にも含められております。

親たちがつくり、先祖がつくった人生の標準は、せいぜい50年から65くらいまででございました。いまや政府が決める高齢者の就労年限も、65歳まで就労可能なように「高年齢者雇用安定法」も年々改善を加えております。あとはわたしたちの覚悟、人生90年、100年働きつづけ、活躍できるような社会のシステムに変更していく、そういう経験の交流が今日の目的でございます。

昨年もひとつの事例から話をはじめました。ことしもひとつの事例をお話し申し上げたいと思います。

去年お話し申し上げたのは、地域全体が一人ひとりが全員参加で地域でできることをしなくてはということで、世田谷区の「クールシェア」の例を紹介したかと思います。地域の商店街の、公共施設はもちろん、ときには空き店舗をそれぞれ使って、「クールシェア」といいまして、お年寄り子ども連れ、このふたつを中心に、だれでもいいそうですが、町角の便利なところに設けて、冷水器でのどを潤し休んでいい。冬になりますと「ウォームシェア」となります。ちょっと体を温めて腰をおろして休んでいく。そういう施設が世田谷区にはたくさん増えているようであります。「ウォームシェア」となりますと、森進一の世界、「遠慮はいらないから温まっていきなよ」。

このごろ全国を歩いていてとても目につきますのは、もちろん行政がからんでいるけれ

ど、民間の人が個人の資格で参加してイニシアチブをとって活動が広がっている。たとえば薬など業界の人たち。地域のなかで自助、共助、公助それに商売の方がはいつてきて「商助」。さまざまな参加が見られます。

70歳まで働けるスウェーデンの模索

きょうはもうちょっと働くことに焦点をしばった事例の紹介をしたいと思います。

平成25年版の『高齢社会白書』に事例として報告されておりますから、ご記憶の方もあるかと思います。わたくしこの6月に北九州に呼ばれて行ってまいりまして、担当者の方とじかに話す機会がありましたが、福岡県は県をあげて「70歳現役社会の実現をめざして」というので、「70歳現役社会推進協議会」を設けて推進を始めております。まだ始まったばかり、平成25年度が初年度です。

いま日本は政策で就労は65歳まで働ける社会になりましたが、人口推計をみても、これを70歳にしないとちません。わたくし数年前にスウェーデンに行ってまいりまして、スウェーデンは高齢化先進国でございますから、いろいろ学ぶことがあったのですけれど、「70歳まで働けるしくみ」を模索しつつあります。始まったばかりでしたからその後のフォローはしていないのですが、スウェーデンの場合は50歳くらいでひとつの線を引いて、勉強をしておいて、その間のサポートをして、それから70歳まで働いてもらう。50歳でやりなおしてスタートを55歳からとすると15年新たなキャリアが高まるわけです。もちろん年金とかは通算するのでしょう。日本と並んで平均寿命ベスト5の中にはいるスウェーデン、とくにヨーロッパ社会というのは年金年齢に対する考え方が違う。日本と文化が違いまして、年金年齢になった人は働いてはいけない、というくらいの強い観念があるようでございます。だからスウェーデンでボランティア活動をするのは高齢者だけ。若い人はしごとと家庭とのワークアンドバランスでいい。若い人が有償でボランティア活動をする日本とは文化が違うというのです。これは偉い先生のお話ですから、わたしなぞはそうかなあと思うところもありましたが。

スウェーデンも日本もみんな含めて、史上始まって以来の「人生100年」という長寿に、100年前の人が予想もしなかった長寿に、いま向き合っている。だったら文化も変わって当然ではないだろうか。スウェーデンも含めて、もちろん日本を先頭に「人生100年」を生きる社会に対応して社会制度システムを含めた文化を変えていく。

そういえばダーウィンがいいました。一番強いものが生き残ったわけではない。いちばん大きなものが生き残ったわけではない。環境の変化に対応して、よりよく自己変革できたものが生き残った。まさにわたくしたちはいま、世界のとくに先進国を中心に広がる「高齢化」という波の中で、いちばんよく対応できる国民はだれだろう、どこだろうということを先進諸国の中で競い合っていく。もうひとつの競争がいまそこにあると思います。参加してわたくしたちの技を競おうではありませんか。

この点で申し上げますと、日本人の「支え合う」ことを美德として、一方で働くことを

「不易」とする文化。いくつになっても年齢に応じてスタイルを代えながら、社会に参加しかかわり、ささやかな収入をえて、自立した喜びを味わう。そういう文化をととてもいいと思うのです。「人生100年」にふさわしい文化は、この日本人の65を過ぎても働きたいという人が過半数である、70までは働きたいという人が圧倒的多数である、それどころか元気ならいつまでも働きたいという人が3分の1いる。この文化を大事にしようではありませんか。

「70歳現役社会」の実現をめざす福岡県

そういう意味からすると、「70歳」という数字を掲げて、福岡県が県をあげて取り組んでいることは掬すべきことだと思います。そして組織の仕方もたいへん民主的でありまして、もちろん福岡県の経済団体、連合といった労組、県の社協のような福祉団体やさまざまな団体、たとえば子育てサービスでもう30年あまりの歴史があるわたくしの母体である「高齢社会をよくする北九州女性の会」、そういうところ全県下27団体でしたか、たくさんの団体が参画している。

「70歳現役社会推進協議会」をつくって、やっていることは主に4つですね。再就職。派遣。就労これはシルバー人材センターとほぼ重なる。自分で起業する。そしてもうひとつNPO活動とかボランティア活動。そして県の中を4つのブロックに分けて、そこに担当者を置いて対応し、一方では県内の事業所に70歳の人を雇うにはどんな問題があるか、60歳の人に比べると身体的にどうかといった調査もしている。

70歳の方が働いている状況というのは、風景からいっても健康管理や年金の管理からいっても、実はわれわれ初めてということです。ですから学者、研究者のもの、先行事例などの情報を集めなくてはならないし、企業の変革とともに、40代ぐらいの社員も60か65の定年で終わるのではなくて、人生の定年はまた別の価値判断があるんだという社員向けの講習も行なったりしております。

まだ2年しか実績がありませんが、2年の中で登録者が5800人、進路決定者が2000人、おそらくいまは一步も二歩も進んでいると思います。

就職事例でいいますと、73歳の男性。資格をもっている方は強いですね。この人は一級土木施工管理技士です。一級土木施工管理技士というのは資格保持者が少なく、73歳で土木工事監督として就職しているそうです。さまざまな資格・技能、身に付けた腕や技を活かす機会があるわけでありませう。

また69歳の男性。この方は介護老人保健施設で車の送迎。運転ができる上に趣味にガーデニングの腕があって、送迎のみで時間が余ったというときにガーデニングをやる。ガーデニングというもうひとつの付加価値のおかげで庭園管理もまかせられて、高い評価を受けている。一人一芸は大事だと思いますけれど、なにか副芸があるといい。

いまま介護保険の理念は他業種連携です。ここに看護師さんがいる。ここに介護福祉士さんがいる。ここに介護装備の専門家がいる。他業種連携でやっということで、

いままでは医療はお医者さん、介護は福祉士と分かれています。これは介護保険制度のDNAですから基本ではありますけれど、これからは高齢者は増えるけれど人口が減っていく。これからますます医療と介護を密接に連携しようという自治体は、すこしずつ又どういう形をとるかかわからないけれど、近隣の地域といっしょになっていく。他業種連携ではなかなかやれないところを、つまり一人で他業種、看護師さんと介護士さんが持ち合うことによって、できるしごとの幅を広げる。

わたしはおそらくこれからの人口減少社会、とくに若い世代の減少社会においては、一人一芸から一人何芸か、運転手さんではないけれど、運転ができれば園芸もできる。長い人生のなかで培っておいた趣味とか技術が、かならずどこかで花開く場があるというふうにお考えいただいたらよいと思います。

これはわがグループ会員のひとりですが、福岡県に独自に「子育てマイスター」というのがございます。マイスターというと偉そうですね、実質的には今の基本的な子育てに対する知識と技術を、約一週間の研修で身につけてもらいます。たった一週間とお笑いになりますけれど、多くの女性たちは、子育て経験値というものを持っています。問題は今の時代にどう合わせていくかということだけですから、一週間の研修で十分のようです。こちらは75歳の女性です。県の「子育てマイスター」研修で最新の知識を習得して認定を受けた人が、「放課後児童クラブ指導員」として採用。ここもこれから高齢者に進出していきたいところです。

さまざまな世代間交流

先週の末にハワイでおこなわれました「世代間交流国際大会」という国際会議からもどったばかりでございます。アメリカのGU、ジェネレーションズ・ユナイテッド。「世代間連合」とでも訳したらいいのでしょうか。そして日本のJANCA（高連協）、他の団体もいっしょになりまして、世代間の交流について論議したわけでございます。実際にわたしたち高連協でも世代間交流はもっとも大事な活動の柱のひとつにしていますし、さきほどご紹介した「高齢社会対策大綱」にも、世代間交流はあちこちに出ています。

同じ年に文科省に「超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会」ができました、そこで人生後半の社会教育、いまのことばでいうと「生涯学習」の中に世代間交流の柱をしっかりと掲げるべく。もちろん人生後半の生涯教育が大切なのは、世代間交流だけではございませんで、日進月歩していく科学技術などは会社で否応なく対応するので日進月歩していくのですけれど、意外や意外、社会常識というのはむかしのままだったりするのです。

わたしはある新聞で「人生案内」を担当させていただいておりますけれど、加害者に同情してしまうときもあります。たとえば娘さんが、母親に暴言を吐きつづける父親に腹をたてた。若い娘さんからみると耐えがたい。なんとかしてこの親父を静かにさせたい。

「DV防止」つまり家庭内における虐待を防止する法律「DV防止法」は2001年にで

ひとつのしごとで社会に貢献していこうという家族には心から敬意を払いますが、それだけでは日本はやっていけなかったし、いけないであろうことも事実です。日本に老いた親を置きながら、時差の反対の場所で働いて外貨を稼いでいる人びとが、家族を含めて70万人もいる。そうして海外も含めて日本中を転勤して働いて、個人所得税を払っているのはサラリーマンです。税収の最大の収入元である。みなさま方がそうであり、そうであったのです。この人たちの所得がなかったら、地域におけるさまざまな計画もここまでいかなかったらと思うます。

介護者支援にあたる孫世代（ヤングケア）

両親が海外にいて働く。もうじき大学進学である孫をおばあちゃんにあずけて海外に行く。おばあちゃんにめんどうをみてもらうつもりが、おばあちゃんが急に倒れてしまうと孫たちがめんどうをみることになる。というわけで進学期を控えたり、あるいは就活のまっ盛りの時期にある孫むすこ孫むすめがお年寄りのめんどうをみる、「ヤングケア」ということばを聞くようになりました。

子どもはふたりしかおりません。しかも全国、全世界へ飛び出していく。場合によっては祖父母が倒れたその介護を、孫むすこや孫むすめが、これから就職これから進学、将来の事業をこれから担っていく若い人たちが、ここで世の中から撤退させられている。孫世代による「ヤングケア」です。イギリスなどにおきましては、未来を失わせないようにということが「介護者支援」の問題になりつつあるということです。日本はまだ数は少ないけれど、いままでは子どもたちが5～6人いたから、やりくりがついた。ところがわれわれの世代からは子どもがふたりしかいませんから、ひとりに事故があつたり海外へいってしまうと、子ども世代でやりくりがつかない。子どもの層を突き抜けて孫に行く。孫は進学、就職の時期。これからの「人生100年」を棒に振って、祖父母の介護に当たらねばならない。進学時期や就職時期の1年2年のブランクというのは、日本ではとくに就職時期のブランクは致命的になる。仮に家族が周りにいたとしても、わたくしたちは「大家族時代」と申していますけれど、介護を担う子どもの数が減って、もうこれからは家族ではみられない。

昭和フタケタ時代の子どもの数が減って2に近づきそして2を割るようになりました。しかもこの人たちは、いま50歳でも結婚しない。50歳通過時の日本人の未婚率、こういって上野（千鶴子）さんに叱られるので、非婚率ないし独身率は、男20%、女11%。男は5人にひとりが独身のまま、ここを通過していくのであります。

わたくしたち高齢者は、世界に誇る長寿社会をつくりあげた。人口が減っていくのはさびしいことではありますけれども、たとえば戦前の日本は植民地にしていた朝鮮半島、台湾その他を含めて9900万人、それを「一億一心」といっていた。戦後処理が終わって、4つ島を中心に独立したとき、昭和22年の日本の人口は7800万人。それが1億3000万近くまで増えました、これは基本的には長寿のせいだし、それにベビーブームがあ

ったこともありましたが、日本社会の適正人口が1億でいいのか8000万人か、それでも多いというのか、諸説紛々でして、わたくしごときがこれが適当であろうという立場にはございません。ただし、人口が減っていくのはさびしいが、増えなければいけないのだろうか。ここは内閣府の主催ですから、あまり政府の悪口言ってはいけないのでしょうか。この程度の意見なら許されるでしょう。日本の国力発展のために人口がこうあらねばならないではなくて、なんで日本が特別に出生率が低いかを考える。わたくしは責任を感じていますよ。われわれの子どもたちが結婚しないで子どもをつくらない。これはやはり結婚が楽しいと思わせない、何よりも女がしごとをつづけていく道を、ヨーロッパなどに比べてつくらなかった。しごとをとるか子どもを産むか、ふたつにひとつを選ばされてきたとき。安定したしごとがほしいと思って産まなかったり、ふたりを一人にしたり、わたくしなんかそうですよ、ふたりを一人にしたり。いまでもほんとうは子どもを持ちたいと思っている。結婚もしたいと思っている。共働きの家庭で、家事をよく手伝ってくれる夫をもつ妻ほど子どもを持ちたいと願っている。むかしの男、われわれの夫たちは、「なに、女房なんか、子どもを産まして子どもをあてがっておけば安心」などと、けしからんことをいっておりました。

時代は変わってきているのです。一人ひとりが自分の人生を、高齢者が自己実現をしたいと思っているとしたら、三〇歳ころの息子の嫁も、子どもも欲しいけれどやっぱりわたし自身として生きる、自分を活かせる職場が欲しい、活動の場が欲しいと願っているのです。いま国会に「女性活躍推進法」が出されておりますが、日本の人口を保つために産んでほしいのではなくて、あなたがた自身の人生をより豊かにするために子どもを持つ、持ったほうがよいと思うなら、わたしたちは総力をあげてお手伝いしますよ、というのがわれわれ高齢者の立場だと思えます。

ファミリーレス社会と「地援」

もちろん、世代間交流に関して、文科省も厚労省も、そして家づくりの点から国交省も、みんな世代間交流を一生懸命やりはじめております。これはすばらしいことで、サービス付高齢者向け住宅で子育て中の家族への支援を行なうなどハードの面での支援もございませぬし、制度改正で文科省や厚労省では、放課後と土曜日に習熟度が遅れている、あるいは自分で希望する子どもを教える事業に力をいれていて、「指導員」や「支援員」の資格で元先生とか、若い人もいますが75歳の人も採用しています。学習指導の方だと時給が支給されています。全国的に世代間交流の場になるものと期待されています。

いまや時代は大介護時代、ファミリーレス社会を迎えようとしております。ファミリーレストランではありません。家族が少なくなる社会。いま50代の人びとが年をとりますと、全人口の3割が一度も結婚をしない。

コレスマゴレスメイレスオイレスイトコレス。

4親等以内の親族がいない人も多くなります。どうしたらいいのか。次の世代にそんな

るので、わたしたちが見本をつくっていく。ことし出たばかりの『高齢社会白書』によると、ひとり暮らしか老夫婦を合わせて57%ですから、65歳以上の人がどういう世帯に住んでいるかという、60%くらいがひとり暮らしか老夫婦。いまあちこちの団地で、地域の中で助け合おう。血縁だけで支えられる人は大事にしてほしいけれど、これからはそうでない人が多数派になろうとしている。血縁、家族縁、親族縁がない人、これからは「地域」を手がかりに、地域で支援する「地援」。地縁の「縁」をサポートの支援の「援」に置き換えて「地援」。地域で支援しあう関係をつくっていかなければ、そうしみじみ思うところでございます。

「人生100年」のなかには、子あり孫ありでも、遠く離れて住む人もいるし、「人生100年」の最後の砦はなんだろうか。いまから築いていくのでしょけれども、地域を中心として、年寄りが主役となって、地域での人の縁をつくり、支え合っていく。高齢者がわが身の健康を守り、健康を増進していく。平均寿命が延びただけでなく、70代の方でいうと体力が10歳程度は若返っているようでございます。

いま「地域創生と高齢社会」ということで、高齢者を移動させようという試みもあり、それはそれで本人の選択であり、憲法にも保障されているのですから、新しい土地で新しい生活を築こうというのもひとつの選択としてあります。しかし、だれにでもできること、いまある地域において、一人ひとりが支えられながらもお役に立つ、だれかを助ける。こういうのを「ビスケット（微・助っ人）」という。「微」はわずか、下は「助っ人」。大きなことはできなくとも、非力であってもしかし無力ではない、ゼロではない。高齢者が全員ビスケットとなりあって、人びとを支え合うことを通して、「人生100年」の伝統を伝えることができるのではないのでしょうか。

「日本昔ばなし」の伝統

血縁、血縁と、儒教文化のなかで江戸時代に以前から伝わっていたであろう「日本昔ばなし」。だれもが聞いて育った「日本むかし話」は、みんなこういうフレーズで始まります。

「むかしむかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがありました」

むかしはまことに男女平等で、ほとんどは老夫婦による子育ての物語です。血縁のない子どもたちを育てる物語です。桃太郎は川を流れてきた桃の中から生まれます。桃太郎はおばあさんが川で、かぐや姫はおじいさんが竹の中から女の子をさずかります。じいさんおばあさんのDNAなどは少しもありません。擬人化されて子スズメだったり、イヌであったり、タヌキといった小動物になったり。

こうして血縁のない子どもを心からいとおしみ、いつくしみ、そして立派に成人させると、「おじいさま、おばあさま、お世話になりました」なんていわないですよ。昔から若い者はどいつもこいつも、そろいもそろって、育てられた恩義を感じてお礼なんていわない。大昔から若いものは自分の未来をめざして自分の空へはばたいていく。桃太郎のじいさんおばあさんも喜んできびだんごを作り、桃太郎も喜んで旅立ちます。「止めてくれるなおつか

さん」などともいわないで、自分の道をすすむ。そして志を遂げて、もちろん、若い者たちが恩義を忘れてはいるわけではありません。育てられたじじばばには心から感謝しておりますから、かぐや姫は月の世界から、桃太郎もじじばばを慰めたのであります。この日本の物語にみる血縁のない世代が交流し、生まれ、立派に成人し、そのことを忘れない、日本のむかし話にある伝統こそ、いまこそわが21世紀2015年の日本の地に移し植えつつ、新たな超高齢社会の伝統を、日本から発信しようではありませんか。

ご静聴ありがとうございました。

(文責 堀内正範)